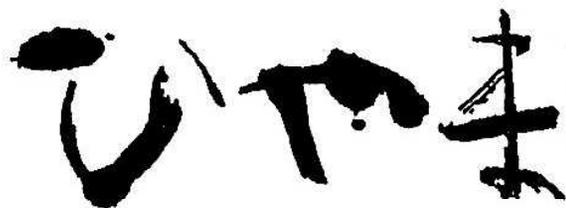


第16号

定価一年間300円
組合員の購読料は
組合費に含む



発行

檜山教職員組合

〒043-0056 江差町字陣屋町86-1
Tel 0139(52)0858 FAX (52)1490
発行責任者 石橋英敏
E-mail: hiyamakyoso@proof.ocn.ne.jp

檜山教組年次大会の討論から

2月27日開催の檜山教職員組合年次大会では、学校現場からの発言が相次ぎました。子どもと教育をめぐる様々な実態が報告される一方で、多様なとりくみが紹介されました。また、教職生活や組合活動を振り返りながら、自分を見つめ、問い直す発言もありました。



発言に耳を傾ける大会代議員

教職員の働き方と教育のかかわりをとらえ、学校づくりの環境として多忙化解決にとりくむ報告が話題になりました。「自分たちの健康と安全を職場全体で守ろう」と銘打ってフリースクールイベントを開催、自分たちの現状を振り返りながら、「過剰な超勤は健康障害を招くリスクが高く、できるだけ爽やかに元気に子どもたちと向き合った方がいい」と合意をつくります。その上に、完全退勤日の設定やストレスセルフチェックなど、学校全体としてのとりくみを確認し、実践しているという報告でした。「みんな実践なので気楽に退勤できたり、必要な休みも取りやすくなった」という現場の声が紹介されました。

討論では他にも、「学び合う」研究活動、同僚の支え合い、保護者との関係づくりなど、苦勞しながらも力を寄せ合って教育活動をすすめる現場の奮闘が伝えられました。そうしたなかの一つに、学校ぐるみで不登校の子どものかかわりを積み上げていると紹介がありました。報告し

かに元気に子どもたちと向き合った方がいい」と合意をつくります。その上に、完全退勤日の設定やストレスセルフチェックなど、学校全体としてのとりくみを確認し、実践しているという報告でした。「みんな実践なので気楽に退勤できたり、必要な休みも取りやすくなった」という現場の声が紹介されました。

この春で退職を迎えます。紆余曲折の歩みながら、ともかくにも教職の道を歩き終えることに、感慨も深いものがあります。顧みて、思い残すことも多々あり、腑に落ちることなく涙のよう



討論の場で発言する
瀬棚中学校分会の
佐竹秀昭さん
(2/27檜山教組年次大会)

2年生のA君は、登校がままならず休みがちでした。でも、担任の先生の、本当に地道で誠実な対応が次第に子どもの心を開き、少しずつ少しずつ学校に足を運ぶようになっていきます。保護者の困り感も聞き取りながら、その子を支える絆を紡いでいくその同僚の姿に「すごいなあ」

かかわり広げ、子どもと向き合う

より先に学校を出なければならなくて、出がけに手紙を担任の先生に託していました。「無理をしなくてもいいこと」「自分のペースで歩むこと」などのメッセージが盛られていたそうです。A君は、作業を伴う教科を中心に授業を受けます。そのため、帰りまで保健室の先生や、他のいろんな先生方がかかわることになります。もう一人の生徒B君は、週に2回夜に登校して学習します。ここでも同じように校長先生始め先生方が声をかけ

とつくづく感心します。A君は登校した際、必ず校長室を訪ね、校長先生にあいさつをしてからその日がスタートします。本人はその行動を一つの糧にしている、校長先生との信頼関係が支えになっていることを伺わせます。そんなA君は、校長先生が留守のときは、日課のあいさつができなくなってしまう。でも、校長先生はそんな時、A君への手紙を託していきます。つい先日、A君が登校してくる時刻

たり、時には一緒に料理したりと、その子のかかわりを広げています。春に向け、昼間二人がそろって教室にいる光景が見え始めました。このように学校全体で見守っているという空気が、皮膚や感覚を通して二人の内部に伝わっているのか、二人は次第に落ち着いて生活が送れるようになっていけると、担任の先生は言います。そして、「安心して学校に通えているという実感も培われているのだろう」とも言います。

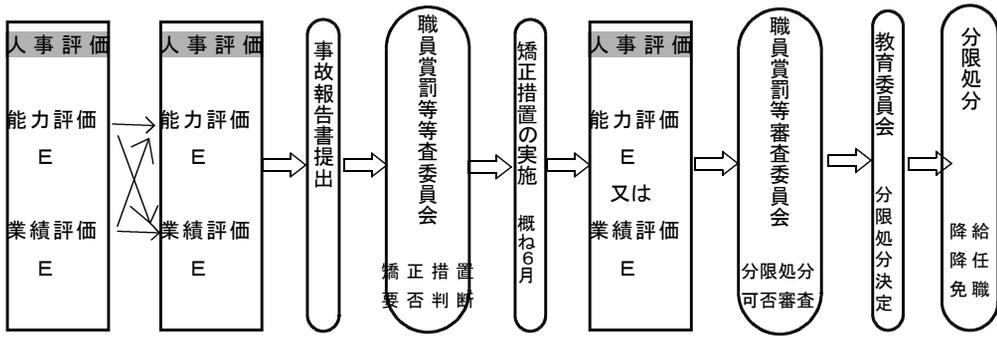
た地道な対応が教訓的で、校長先生はじめ教職員が子どもを真ん中に据えて、あせらず、じっくりととりくみをすすめている学校の姿が印象深く浮き彫りになりました。

佐竹代議員の発言の要旨を紹介いたします。「最後の職場で貴重な経験を得た」という感慨もリアルに伝わってきます。

現場見つめ、教育語って明日へ

(本文は発言内容を本人が文章化したものです)

人事評価を活用した分限処分までの流れ (道教委資料より)



人事評価精度と分限活用

従来方針で取扱い連続「E」は契機

人事評価制度と分限処分についてみていきます。

人事評価において2回連続して最下位（E区分）となった職員に対して賞罰等審査委員会の審査を経て「矯正措置」を開始、その後の評価がなお最下位となった場合に分限処分を行います。

人事評価制度と分限処分についてみていきます。

ここでいう2回連続「E」として考えられるのは、別表で示した4つのケースです。(下表参照)

「矯正措置」実施、その直後の評価が再び「E」の場合は賞罰等審査委員会で処分の可否を審査、教育委員会に付されて「処分」の決定という過程を経ます。(上図参照) 道教委は、現行の「取扱方針」と「運用」で行うとの考えを示しています。また、「2回連続E」

はあくまで「契機」にすぎないことを確認しています。

恣意的運用の排除を確かなものにしていかなければなりません。

- 「2回連続E」のケース**
- ①前期業績評価「E」→後期業績評価「E」
 - ②前期業績評価「E」→能力評価「E」
 - ③後期業績評価「E」→能力評価「E」

悠々自適と羨む友の言葉に思う 人間として大切なものがある



檜山教組年次大会
青木副委員長挨拶

年次大会の閉会宣言を行った青木副委員長の挨拶が話題となりました。大会参加者から「考えさせる言葉だった」「教職の仕事を見直した」などの声が寄せられました。紹介します。

ぼくは千葉県出身なんですけど、ここ数年高校生時代の友人から、電話がくるようになったんですよ。何か高校時代の集まりが増えたようで、その飲み会の席から「お前も来い」みたいな電話がくるようになってたんです、ここ数年です。

でも、ぼくは千葉があんまり好きじゃないんですよ。人がごみごみしてるし、人間関係が希薄だし、学生時代にろくな思い出ないし。何も懐かしさなんか感じないんですよ。だから電話が来ても「わかったわかった。こっちは立って込んでるから」とか適当になしてました。

それが先週の週末、たまた

ま関東に行く用事が出来て時間があつたものだから、「そんなに俺に会いたいなら、会ってやるか」と思って、会ってあげることにしました。

その友人は東京ではいわゆる「勝ち組」です。受験競争を勝ち抜いて、名の知れた大学に入り、名の知れた会社に入社して。だからぼくは、「会っても話が噛みあうのかな」と思っていました。北海道に出て学校の先生をしている自分なんかが言っていることが、あいつに分かるのかな。と思っていたのです。

ところが会ってみると、そいつはぼくの話の食い入るように聞いてくれました。学校のこと、子どものこと、ぼく

が感じていること……。

そして最後に「お前、いい生き方してるな」「お前、悠々自適じゃないか」と言ったのです。

「悠々自適」は、退職者への言葉ですよ。ぼくはまだ現役なのに、何でそんな言葉が出てきたのか、考えました。

彼は一流の会社に勤め、収入もきつとそれなりにあるのでしょう。彼こそ「悠々自適」のはずです。そんな彼がなぜぼくに「悠々自適だなあ」と言ったのか。

多分、彼の仕事は「他に勝つこと」と密接にリンクしているのでしょう。企業人として少なくとも他の会社に勝たねばならない。出世競争があるかは分かりませんがもしあったとしたら、同僚にも勝たねばならない。

でもぼくは人に勝つ必要がない。仕事の目的はみんな力を合わせて、子どもたちを

本当の意味で幸せにすることです。それ以上でもそれ以下でもない。

「競争に勝つこと」と密接にリンクした仕事は「悠々自適」に思えたのかも知れません。

今日話題にあった「人事評価制度」は教育現場に競争を持ち込む意図で導入されます。この意図から現場を守るためにも、競争に勝つことなんかよりも素晴らしいものがある、人間として大切なものがある、先生方が力を合わせる素晴らしさ、力を合わせて子どもたちの成長を見守る素晴らしさ、それを共感できるような職場をつくっていく必要があると思います。

そして今日の年次大会でも、競争に勝つことなんかよりも、いやそんなもの比べようもない、素晴らしいもの、大切なものが語られていたと思います。

檜山教職員組合役員

新役員

よろしく
お願いします

※所属は新年度勤務校

- 委員長 石橋 英敏 (上中)
- 副委員長 白山 尚 (館中)
- 書記長 青木 治真 (大中)
- 書記次長 安里 朗 (河小)
- 会計委員 茶森 茂樹 (館小)
- 執行委員 木村 清一 (南小)
- 執行委員 菊地 信也 (江中)
- 女性部長 山根 俊美 (南小)
- 青年部長 市来 成子 (上小)
- 佐藤 亮樹 (南小)
- 養護教員部長 野口 真弓 (江小)
- 事務職員部長 笹谷 透 (上小)
- 監査委員 川瀬 博治 (江小)
- 森田 博則 (滝小)
- 横田 聡 (鶴中)

退任

※所属は現任校

- 執行委員 越前 秀一 (江小)
- 女性部長 遠藤 美由樹 (今小)
- 監査委員 佐竹 秀昭 (瀬中)

お世話になりました

